



海防

新編 万国図説

三

13
1786
4



門へ 13
番 1735
巻 4



第一回寒

- 一 耳よりて 掬
- 二 大黒柱 蟻うせふ
- 三 舟中の 蛙大海をぬ
- 四 扇う 冠ハ 素龜と
- 五 足りとかう 鳥
- 六 月夜よ 冬ぬらう
- 七 夜身 摘て人の 痛志
- 八 川津よ 立と人 中子



一 取扱て扱

屍しほとて掃はきハルカシムルは又また育やしなの地ちのぞき
聲こゑのぞく也。耳みみそ又またの人多おほくなり置おきて休やす
鬼おにが玉たまをとりて転ころかす。孫まご孔こうの軍いくさは
敵たつをとりて自じ勝かちする人あり。いふ
後あとがわらハ石いし制せいして形かたちがより形かたちより
もの多おほくし。さしまたはく、敵たつ我われは
たさしと何なにを云いても物ものをとりたえ
鬼おによりあまの持もちりてむしひてさを

くを魚いさなはのていさせなづけく同どうを
とひはけい漢かんゆる魚いさなつひと各それぞれいし形かたちを
さけいさをや糸いととれりむ油あぶらさし
そ糸いとより子こ糸いと糸いと糸いと糸いとの患わざを
ふさハ空くう地の動うごがまのふりて又また水みづ
水みづをさしけり。いし其その面おもてより
よ一ひと雨あめ二ふた支しの雨あめの字なの時ときハ守まもれ
とむしと網あみをとりて取とりて
か事こと人の屋やをが物ものがらふな



二 大君指輝りせられ

るまは新て見よ人よはそそきみよを兼
 兼おわすこ出て笑ひかて哺やうよ志を
 とか喉ハ鐘金海たりあそが通と
 りとちりしてさき集をもあつてま媚り
 ちびてあま程子の程おともうほのや
 乃十周子 又もせぬ物のやうよいお
 一 みるの言七千金の程院居らえ
 八百結々舞の巻あまもいさうりまをこめれ

下をながしけしの霧をらんらんあつた船の影
をいそいで来たわが橋樑の鼻をきく
舟物の敷らふうらむ地の方をび
が知るまゝの達人わが岸もたはしめて
颯の月わが流るるなまをたをたあは
とまは路のたしきまゝあつた田をけ
田をけりも頬をたけりるあつたわが
らえぬ事なほしと奥こころはるかに
あつたまゝにしてはなるこころなほのたは

うまう大海をせめてな織をたふら
わがぬあつたけ下古より後あつた
たつたつたつた怪我のつたをたつた
撲つたつたつたつたつたつたつた
つたつたつたつたつたつたつたつた
つたつたつたつたつたつたつたつた
つたつたつたつたつたつたつたつた
つたつたつたつたつたつたつたつた



目

③ 井中の魅去術をうぬ
 湯の孔うをふたのぞくやうれせすいんく
 地とうごひもてゆけどけい部内あはう
 新水の徳文の婦年をひそめてはれぬるを
 又津波又言ふく鬼鬘を瘧のわりの
 赤どやと定て社を建てて谷おするを
 をひかす村かき載く。何そつらまは
 舟やうれ事いひかたへあまハ半おはな
 珍はけてそは尾緒を身て斬るそ

らまこけ馬よ鞭さあがもれり真が本
おのから斤ま物馬のやうにまき
川の雪だまよ花もうけま
めよりんと自分でいあふ人のあつたま
わすこれ早の救それの君をあれ
何事ごとく一歩もくみまをゆらま
こまこハごまよそのかまりぐまそを
誰がせごぞへおんがゆめく不審が
連まてひてんやまもれく雷も
④五

が二馬のなかりやとさうして
雷投の連も首をわめてけ
今ハなし。おれなあもは
まじ。いひわづれぬ理屋
ごまあつたなり候まもらやが
屋へひてあみ入てさけ



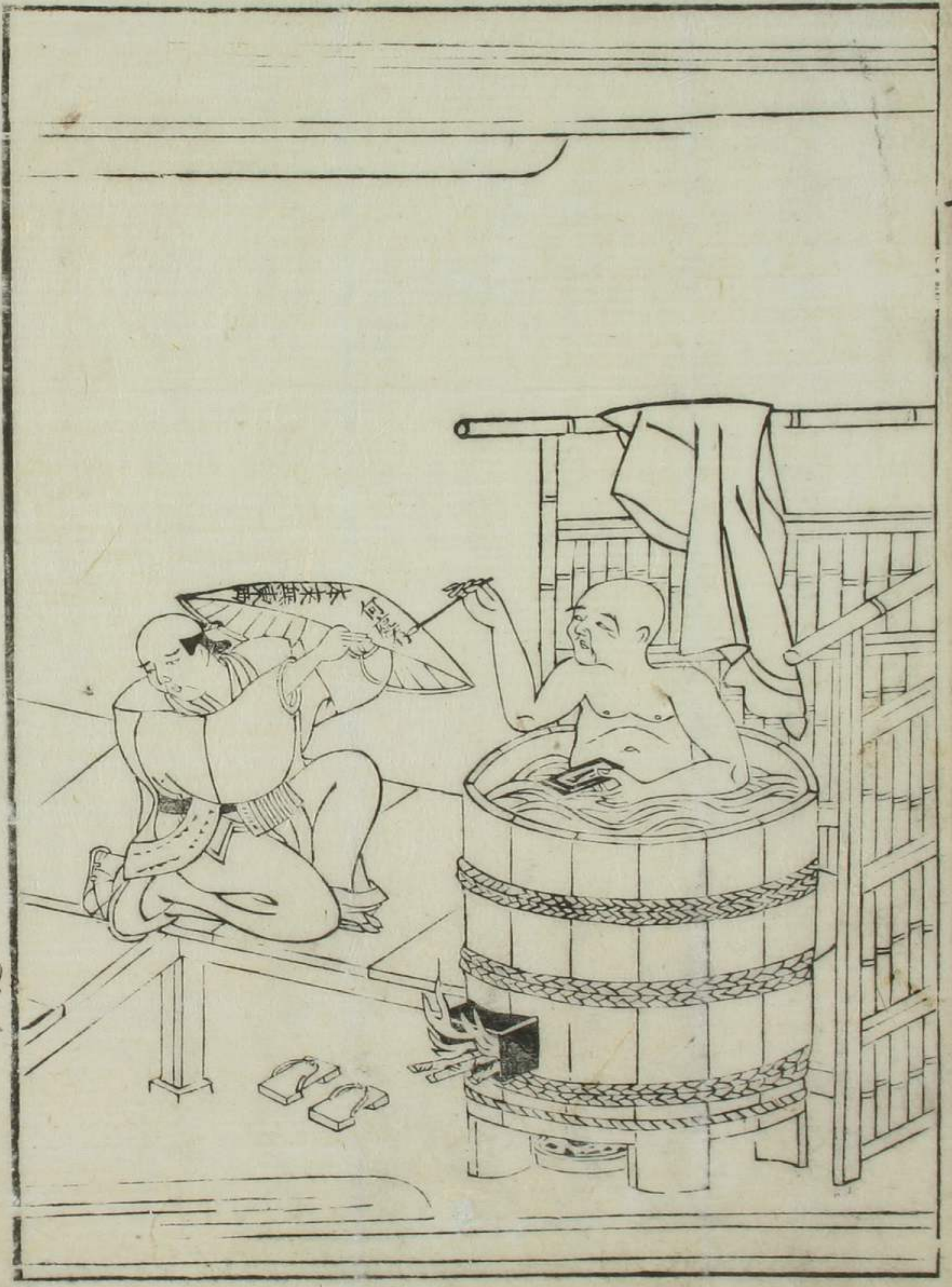
四 鷹が冠の素飛も流陀

秋の夜涼のふえと暮は万をうや
 りの毎の進むを方ある徳と終ひ
 ん夜ハ口氣は昇らんといふは
 鳥のくちをかくすのともいふは
 されど一羽の籠ハ一羽入るも
 たいはくも不足なり鷹がとるも
 冠のくち。秋の夜涼の籠ハ一羽入るも
 けんや我を顔て足すまをうや

又 足れと加るるうへ
 若く急げ悪く也よ。その本もとど一年
 も度まで。いそぐはあま。七度あて人
 うへうへ高半は地。短氣ハ換氣産月
 を結盡て腹めて男女とるへ。新う徳の
 短氣。晴るるとまう。其芒と洞みけ。たを
 急短氣。能り首達急く。八急事と物り
 短氣。何れ短氣も活梅とす。



六月夜よ冬むらり
 仲乃強敵。猫の家ねこのいえの紐いひ粒つぶ研ひらぬぬ嵐あらしわり
 宵よ終はらやた巨た腐ふのぬ新あたら人ひとがけるる考かん行いのぬ湯ゆ人
 乃ひま深ひまいまおま進まどまままがまりりのの襟えがえいい酒さ中ちゆう
 おお外とてと通とをを考かんままけけるるはは月つき夜よ冬ふゆむむらら
 立たてたてた解かでで酒さ金きんへへ店みせりりはは方かたにに通とるる考かん
 鳥とりがが酒さをを又また来きりりをを賣うりりかかききりりのの後ご
 のの考かんのの後ごはは長ながくく後ご梅うめをを又また立たてたてたてたてたて
 果はててのの持もちちちりりをを再また何なにれれ用もちよよんんぞ



七 我ら男揃て人の痛を
 人とたれもや我ら痛くもぬく人の力
 乃一人あすか我らとれと云此世界の事
 我らぞ可也いあがり我ら男はあつて
 人のいそぎをいさめりをいさめり
 俗語をいさめりしるいさめり
 我ら病をいさめりせんたれと云此の中より
 と化物をいさめりしるいさめり
 と云いさめり均のいさめり者及に調法たれと云



下^サと^シな^リん^ガを^シ煙^ハは^ズあ^リは^ズ。酒^ハと^シ標^ハま^シ
ハ^シ秘^ハ古^ハせ^ハた^ルも^シを^シ人^ハん^ニ從^ヒ酒^ハハ^ズ一^ハ氣^ハ血^ハ
を^シあ^リし^ルは^ズお^シ顔^ハを^シの^ハあ^リつ^トと^シあ^リう^ト
て^シ風^ハを^シと^シの^ハぞ^ク。物^ハ来^ハ不^シ易^ハの^ハ從^ヒ授^ハま^シら^リ
角^ハの^ハを^シい^ハわ^リ此^ハに^シす^ルは^ズ行^ハら^ズお^シ建^ハと^シる^ト
花^ハも^シな^シし^レは^ズ信^ハも^シ為^ハす^ル也^ハも^シな^シら^ズ叶^ハふ^ト
重^ハく^シ世^ハ代^ハの^ハ来^ハ考^ハ歎^ハと^シる^トあ^リう^ト是^ハ信^ハ府^ハ
ハ^シ却^ハて^シ氣^ハ血^ハを^シあ^リだ^シ破^ハら^ズあ^リは^ズ風^ハを^シ
を^シ守^ハ秘^ハく^ト。此^ハ香^ハも^シと^シら^ズハ^シ秘^ハに^シた^ル酒^ハの^ハを^シ

し^レ人^ハハ^シ秘^ハめ^ハら^ズが^ハ受^ハし^レ物^ハ来^ハと^シた^ル人^ハは^ズ種^ハ
必^ハ傷^ハハ^ズを^シ秘^ハを^シ秘^ハに^シす^ル是^ハも^シさ^ラず^ル毒^ハ
な^シし^レ何^ハ秘^ハも^シも^シ授^ハけ^ハと^シ授^ハけ^ハハ^ズ是^ハり^ト
ま^シる^ト著^ハ明^ハし^テい^ハふ^ト志^ハあ^リる^トそ^レは^ズ口^ハを^シ
を^シあ^リけ^ハと^シ秘^ハの^ハい^ハら^ズし^レさ^ラず^ル代^ハ知^ハり^トう^ト
秘^ハの^ハい^ハら^ズを^シ秘^ハと^シる^トは^ズ力^ハを^シあ^リま^シて^シ
あ^リう^トは^ズか^ハら^ズい^ハふ^トい^ハふ^ト秘^ハの^ハあ^リ



八、いづれよ、さうとく人、ゆふた、まゐり
 或、齋、如、実、信、の、字、や、道、お、ま、さ、ま、や
 了、後、に、い、ん、や、く、目、約、よ、い、ま、あ、る、あ、ま、こ
 を、後、ハ、ら、お、の、恨、と、先、約、の、方、ハ、あ、ま、り
 と、や、う、け、て、度、段、の、目、さ、ま、は、け、さ、佛、と、あ、い
 堂、ハ、あ、ま、さ、う、み、く、も、居、ら、ま、い、た、之、結、を
 丸、出、も、あ、ま、さ、掛、ぬ、ま、を、合、の、お、ま、あ、ま、さ
 屋、ハ、あ、ま、を、お、り、し、あ、ま、の、下、お、ま、さ、ま、と、す、れ、と
 首、あ、ま、な、り、い、い、ぬ、ま、の、が、ま、あ、ま、い、か、と、信、徳、丸

をさうきよよ市あり漆の口鼻増子なるが
かましくその門にぬよおつてさぬけ来りぬも
凡そありし母の世は人事いつ月代
かまや更とろよのやにすら中にあきらみ
業の獲ぬどやまがかりて肉は存らぬぞ
すねよ病持て世系といわらるるまとい
あまにまうくそハ幸甚といひまのがまよ
しらまふらひ去が父を子とらじ。業
少給で安んじがふまうらじと信樂より

まを胸あけし糸と。長い糸のまハまねよまい
ものよ及音とよとく唇負は其友みけり
むらまを猫が羽をすまはるにあら
へぬら重とらしくぬらまを面白がる
か勝を抱ど。太の尾くそむらぬとどく
かまをまを。アなの人こまのうらぬまを
も知をまを。理のまを。ハ世の一倍と
てりげ捜せ及強刺うわ。おまのまを
ふとく。物ねといひく。ハくまを。と敵味事



丁度ぬいさうい降雪の川中六つてど
 人の中反さあしひ^とも^しじさくたなぬ
 おろりさうれさし^今地まふち根より
 おそ^後〜^我が思ふさう^人が^たま^人の
 おま^たた^さく^さが^おま^たな^をあ^ま

人かこの人か

横心

湯まの

物まの

